

漢法苞徳塾資料	No. 090
区分	医学史（15期入門講座）
タイトル	古典についてⅢ（瘀血論と温病学）
著者	八木素萌
作成日	1990.01.07

## 1. 主要な温病学の著作について

代表的な書籍と言われているものは、次の通り。

『温病名著精華』（科学技術文献出版社重慶分社）には、13種類の著作が紹介されている。

『温疫論』（呉有性；又可）

『傷暑全書』（張鳳達）

『広温疫論』（戴天章；麟郊、北山、）

『傷寒温疫條辨』（楊璇；玉衡、栗山）

『疫疹一得』（紀文達；曉嵐、〈閱微草堂筆記〉—桐城医；余霖、師愚、）

『外感温熱篇』（葉桂；天士、香岩）

『外感温病篇』（陳祖恭；平伯）

『湿熱病篇』 [= 湿熱條辨]（薛雪；生白、一瓢、牧牛老朽）

『温病条辨』（呉瑭；鞠通）

『温熱経緯』（王士雄；孟英）

『随息居重訂霍乱論』（王士雄；孟英）

『時病論』（雷豊；少逸）

『温熱逢源』（柳宝詒；冠群）

### ※温病学形成の過程と重要な貢献を行なった医者

『温病正宗』（王徳宣）は「温病学」を全体的に紹介し、その学説の形成と発展に関わった人々の論の枢要点を引用している。そこに記載されている人々は次の通り。葉天士・呉鞠通・恽鉄樵・王安道・張鳳達・呉又可・陸九芝・戴麟郊・王孟英・李識候・凌嘉六・柳宝詒・陳葆善・沈漢卿・王馥原・楊如侯・張山雷・雷少逸・章巨膺・薛生白・その他、明代以降の極めて多くの医学者の名が記述されている。

2. 『温病名著通俗講話』（沈濟蒼・沈厭法など共著）には、温病論の形成段階に、二つの系統の学派、つまり、「呉又可・余師愚・楊栗山・劉秘峰など」の温疫論の系譜と、「葉天士・薛生白・呉鞠通・王孟英など」を代表的な論者とする温病論の系譜と、この二系列の論が生まれ、次第に統合されて行く事について記述している。やや初期の温疫論が少し遅れた温病論に、激しい論争のプロセス中で深刻な影響を与えているが、その論争はもともと不要だったのだと指摘している。

呉又可は彼の『温疫論』の中で、温疫の病因は「風・寒・暑・湿・燥・火」の六因（＝六氣）であるよりも、「癘氣」と言う「触者即病」の伝染性と流行性の激しい「邪」による事を述べ、主に湿熱疫を記述しており、余師愚は『疫疹一得』では発病の過程と流行過程を詳述して、積極的に病邪を体外にキヨ邪排出するようにし、急症には急攻するようにすべきであること、また清熱解毒の大剤を投与しなければならないこと、等を主唱して、急症・重症に対する治療と言う面において、現実的で指導的な寄与を行なった。さらに、『清瘟敗毒飲』の処方を作成した点も著名である。

明代の汪石山は『証治要訣』の中で重要な提起を行なっている。それは「新感温病」と「伏气温病」は全く異なるものである点を指摘したのである。また、冬に寒に傷られたのが即発病しないで春になってから発病するのが「温病」であると『黄帝内経』熱論第31に言っているものだけでは無く、春気に犯される「春温」と言うべきものがあり・夏気の「中暑」や秋気の「傷湿」や冬気の「傷寒」などと似通った「新感の温病」もある点を指摘する。そして、温病は皆、「伏邪」が熱病症候となって規われるものであると言う伝統的な観点を打破したとされているのである。そのような汪石山の功績を『温病名著通俗講話』は記述している。また、汪石山の指摘した「伏邪が熱病候になって行く」状態の症候論と治療については、清代の柳宝詒が『温熱逢源』に詳しく論じている。

葉天士の『温熱論』とされているのは、実は彼の口授を弟子たちが整理したものであるが、「温病学」上の重要な文献である。「衛氣榮血辨証」は葉天士の功績に帰せられるものであり、「三焦辨証」は呉鞠通の『温病條辨』による達成である。それは、「衛氣榮血論」を踏まえて整合的に提起した理論である。この「衛氣榮血辨証」論と「三焦便辨証」論は「温病学」の核心的な理論であって、この両論の研究は「温病学」研究の主要な課題となっている。葉天士と同時代の温病学家である聶生白の『湿熱病篇』は、湿熱病の病因論を感染発病の病機と辨証と治療論に関する専門書として評価されている重要な文献である。また、王孟英の『温熱経緯』は「内経と傷寒論の説を経（たてい）とし、葉天士や薛生白などの諸家の説を緯（よこい）としていて温病学上の非常に重要な貢献」となっているものであると評価されている。また「外感熱病」と言う概念の提起は、彼が最も早く行なったとされている。

以上の他にも重要なものと思われるのは、陳平伯『外感温病篇』・雷少逸『時病論』・楊栗山『傷寒温疫條辨』・俞根初『通俗傷寒論』・何廉臣『重訂広温熱論』などであろう。

温病の成立発展の歴史的な経過を、『温病名著通俗講話』（沈濟蒼・沈厭法など共著）は、おおよそ次のように概括している。

- A) 温病学は、衛氣榮血辨証と三焦辨証の理論体系を確立して、温病に関する系統的な「理（理編）・法（アプローチ論）・方（処方）・薬（薬品）」を纏めた。中でも「衛氣榮血辨証」は、温病の本体理解と病態変化傾向の規則的な側面の把握と言う面では、『傷寒論』の「六経辨証」に対比しても「異曲同功之妙」とも言えるものである。
- 註（ ）の中の部分は八木註

- B) 温病学は『内経』『難経』『傷寒論』などの古典の理論と基本精神を全面的に継承しており、さらに、それらの補充と発揚を行なっているため、中医学の発展にとって非常に大きく・かつ・良好な寄与となっている。
- C) 大量の臨床成績によって立証されている事は、温病学は内科の急症重症危症と雑病に有効であり、これらの病候に取り組む上で、相当に大きな指導的意味を持ったものであるという事である。

### 3. 三焦辨証論と「新感温病」の「伏气温病」について…

#### ○三焦辨証

- A) 病邪の侵襲経路観：『温熱論』に「…邪従口鼻而入・故曰上受・但春温冬時伏寒・蔵於少陰・遇春時温気而発・非必上受之邪…」[ ]
- B) 「…湿熱証・悪寒発熱・身重・關節疼痛・湿在肌肉…」
- C) …湿熱証の重要な鑑別問題の主題は、
- イ：悪寒
  - ロ：発熱
  - ハ：汗
  - ニ：胸病
  - ホ：舌白
  - ヘ：口渴不引飲
  - ト：乾脇
  - チ：耳聾
  - リ：痘厭
- D) 『温病條辨』呉鞠通の三焦辨証は、葉天士の衛氣榮血辨証理論を、その論の基礎の上に立って更に一步発展させたものと言われている。「…温病之不大便・不出熱結液乾二者之外…」(温病ノ大便セザルハ熱結ト液乾ノ二者ノ外ニ出ズ…訓読八本)
- E) 呉鞠通は、温病には「風温・温熱・温疫・湿毒・暑温・湿温・秋燥・冬温・温瘧」の9種に一切の温病は包括できると認識している。
- [上焦篇]には「衛分証・気分証・榮血分証・暑温・伏暑・湿温」について記述し、[中焦篇]には陽明3大証(1;熱結液乾大実証・2;熱結而液不乾証・3;液乾多而熱結少証)・承気湯の証と治についての変化・下後諸証・下後注意点・陽明温病發黄の証と治・陽明温病小便不利の証と治・太陰温病(湿多熱少・湿熱相等・暑熱挟湿)を記述し、「下焦篇」では主証・兼証・調理について論じる。

F) 三焦問題をまとめると、次表の通り

種別	上焦	中焦	下焦
発病病変の部位	主に手太陰肺経・ 手厥陰心包経	足陽明胃経・ 足太陰脾経	足厥陰肝経・ 足少陰腎経
発病機理	多くは表熱証	多くは実熱証	多くは虚熱証
発病段階	多くは温病初期	多くは温病の最盛期	多くは温病の終局期

○湿熱論と湿邪論に関して…

薛生白『湿熱病篇』の記述を表記して参考に供すれば

	主要病機	症候の特長	治療原理	薬方
陰湿	湿邪がまだ発熱を 来たさない状態 で、表の分に鬱滞 している。	悪寒し無汗である が、発熱もしな い。	芳化辛散	藜香・書留・晃活 など
陽湿	表の分に鬱滞して いる湿邪が已に化 熱している。	発熱し発汗して悪 寒は僅かかであ る。	芳化清利	藜香・豆巷・滑石 など

熱型	臨床的様相	主要病機	脈と症候
湿熱俱盛	身体に熱があり顔色は 晦い	湿邪が鬱滞して熱を呈する に至っており、熱はその湿 と俱に所在している	発汗・胸の病・舌苔 は黄膩・脈は濡で滑 数
陽明熱盛	熱は勢い強く高い・顔 色は赤くなっている。	裏熱は盛んであるか、正気 も負けていない。	汗多く煩渴し・舌苔 は黄燥・脈象は洪大
気虚発熱	熱は午前の方があ る	元気の不足・その為に陰火 が上に突き上っている	汗少なく・口乾き・ 呼吸は短く・脈は虚

○湿熱証と狭義の傷寒と伏気温病の区別

病名	発病原因	邪の所在
湿熱証	太陰の内傷で、湿と飲とが停滞していた所に、 病邪がさらに加わった	太陰・陽明
狭義傷寒	寒邪が陽を犯して、鬱滞して発熱するに至った	太陽
伏気温病	少陰の蔵と言われる働きが不良のために、内傷 的に木と火とが火番（あぶり）あい、そこに風 邪が入ってきた。	少陰・太陽

## ○湿熱証・狭義の傷寒・伏気温病の三者の鑑別問題

病名	悪寒の程度	主要病機	症候と脈状
湿熱証の 起り初め	悪寒は初期には あまり重くない	陽気が湿邪の為に阻 遏される	やがて只発熱して寒気を感じる事 無く、発汗し胸痞え、苦苔白く、 口渴するのに飲まない
太陽傷寒	悪寒が激しく衰 える事が無い	寒邪が表陽の機能を 束縛し、腠理は閉塞 する	発熱するが無汗で頭痛や骨節痛あ り、舌苔白くて渴かない。脈は浮 緊
風温の起 り初め	悪寒は軽いが時 には暫く強くな る事あり	風熱の外襲のため に、衛気が鬱遏させ られる	発熱・咳嗽し・咽喉痛あり・口が 微かに渴く、舌縁と舌尖が赤く なっており・脈状は浮数

## ○湿邪と三焦

類型	主証	病機	治法	
湿蒙上焦	閉目して明けたがらず 時には譫語する	濁邪が上焦に蒙っている	宣湿展氣	調暢氣機
湿伏中焦	胸病・口渴	湿濁が伏せているが如くに 鬱滞	芳香化濁	
湿流下焦	尿は濃く・自利する	清濁不分	淡滲分利	

## ○「新感温病」と「伏気温病」の区分

	新感温病	伏気温病
病因	温邪に感染 何時でも感染発病する	裏における伏邪が原因で、邪が入ってか ら間を置いて発病せしめる
病機	表から裏へと入って行く	裏にあったものが表に出てくる・又はさ らに深く陥入して行く
症候	始めは多くは表静証である	始めには裏熱証として現れる
脈象	初期には「浮数」	初期には「弦数」
治法	軽く熱を済ますような処置をして経氣 を宣透させる方法が中心	直ちに裏熱を清ます事が主
辨証	初めには病は浅いが次第に裏に伝わ って行く	初めから病は深く重い、そして容易に危 険な症候になる
転帰	適切に治療すれば、短期に軽いま ま治っていく	邪の状態としては、伏邪がひどく深い ので、罹病期間も長くなる

◎温病論と瘀血論・傷寒論と瘀血論・難経と瘀血論・内経と瘀血論

◇瘀血論の完成と主要著作

清代・王清任（全任・字は助臣：1768～1831年）の『医林改錯』（1830年）は瘀血治療論、特に瘀血論と活血化瘀の専門書として高い評価を得ている。

清代・唐宗海（容川：1862～1918年）の『血証論』は、血証の診断と治療を論じていて、中医学への歴史的に偉大な貢献をしたと評価されているものである。

◇温病論には、伝病論に病邪が太陽から心包に「逆伝」して血証を引き起こす事を指摘する面、三焦ともに栄血病候がある事を記述しており、その辨証と治療論がある。従って温病学は瘀血論完成の直前までを準備したのである。

◇傷寒論には、太陽蓄血証・陽明蓄血証の記述があり、また婦人雑病に対しても血鬱や瘀血などに対応する駆瘀血薬方を示しており、固痛の治療など多くの瘀血論が展開されている。

◇難経では、有名な積聚論と奇経論の中に七疝聚論があって、それを砭石によって治療する記述がある。

◇内経では多くの篇に血証・鬱血・虚血・失血などに関する記述がある。

瘀血の診断と鍼灸による治療は、別に、腰を据えた研究・研修の機会を持たなければならないもの  
と考える。